本学学生の短大生活における満足―不満足の要因の分析：

――「特推」と「入試」についての比較検討――

中　居　伊　久　緒[1)]

先に，中居（1983）では，本学相談室が1975年（昭和50）年度入学生より実施している「相談カード」と「短大生活をふりかえっての意識調査」にもとづいて，本学1981（昭和56）年度入学生の志望動機，入学時の満足度，卒業時の満足度などを報告し，卒業時の満足―不満足の判定に影響する要因を検討した。その結果を以下に紹介する。

入学時，「自分の能力にふさわしい（自分に向いている）」，「自分の希望する科があった」という主体的で明確な志望動機を多くの者が持っていた（73.0％)。特に保育科生のその割合は高かった（90.6％)。キリスト教科生には「家族，親戚などに出身者がいる」，「先生，親等にすすめられて」という志望動機が他の科生に比べて多かった。満足度に関しては，「志望した科ではないがこのままでよい」という消極的なものも含めると，入学時に満足していた者がほとんどであり（84.1％），保育科生と英文科生のその割合は非常に高かった（それぞれ85.9％，91.5％）。進学目的については，近年の一般的傾向として短大志望女子に強いといわれている，教養志向と資格志向が見られたが，学生生活エンジョイ派も存在した。キリスト教科生は他の科生とはいくぶん異なる傾向を示し，「先生，友人との人間的接触をうる」に約半数の者が回答していた（46.3％）。

卒業時の満足度では，「自分の能力にふさわしかった」，「自分の希望する科で満足であった」，「入学時には特に期待してなかったが充実した二年間であった」に多くの者が回答し（71.2％），キリスト教科生の後者の項目への回答は他科生に比べて相当多かった（24.4％）。進学目的の達成度では，「友人との人間的接触（78.9％）」，「大学生活エンジョイ（55.0％），「自己再検討（43.5％）」などの面で重点を置き得たとする回答が目立った。保育科生には「専門的知識，技能の習得（47.0％）」，「教師との人間的接触（21.4％)」，「資格取得（50.4％）」に，キリスト教科生には「友人との人間的接触（61.0％）」，「自己再検討（58.5％）」，「人間形成に役立つ教養，知識，経験の習得（58.5％）」に，それぞれ回答した者が他の科生よりも多かった。

数量化第Ⅱ類による分析の結果，卒業時の満足度を高める最も強力な要因は入学時の満足度であった。次いで志望動機，そして進学目的のうちの資格取得と専門的知識，技能の習得などが満足―不満足の判定に強い影響を及ぼす要因であった。

本学への志望動機や入学時の満足度が卒業時の満足度を高める強い要因であるということは，他大学（もしくは他科）ではなく本学（志望科）へ入学したことに満足していれば，2年後の卒業時に短大生活は肯定的に評価され満足と判定されるということである。しかも，先述のキリスト教科生に見られたように，2年間の短大生活の送り方次第では，予想外の満足を味わうこともあり得るのである。現在700名以上の卒業生を毎年送り出しているが，卒業生全員が短大生活を満足と判定することは無理としても，できる限りその状態に近づくことを目標に努力することを我々は惜しんではならない。2年間の短大生活においていかなる教育的配慮が必要なのか。それを解明する手がかりを探るため，1982（昭和57）年度入学生を対象に，先の中居（1983）と同様の分析を行なう。数量化第Ⅱ類によって卒業時の満足―不満足の判定に影響を及ぼす要因を明らかにするのであるが，今回は併設高校からの「特別推せん制度」による入学者（以後「特推」と略す）と入学試験による入学者（以後「入試」と略す）とに分けて分析する。

方　法

1982（昭和57）年度入学試験の合格決定者には，入学案内を含む諸資料と共に「相談カード」を配布し，「特推」には別途配布した。それらは入学時に回収した。翌年度末，卒業予定者全員に「短大生活をふりかえっての意識調査」を配布し，後期末試験最終日に回収した。分析のために使用した質問項目を表1に示す。多変量解析数量化第Ⅱ類を適用する手続上，上記のアンケートの一方でも回収できなかった場合は集計の際に除外した。最終的に，中途退学，卒業延期者を除く卒業生759名中629名（82.9%）を対象とした。このうち「特推」は135名，「入試」は494名であった。科別のうちわけは，英文科230名，保育科109名，家政科241名，キリスト教科49名であった。

表1　質問項目

「相談カード」より

あなたは本学にどんな理由で志望入学しましたか。該当するものに1つ○印をつけて下さい。
1．自分の能力にふさわしい(自分に向いている) 2．自分の希望する科があった。 3．家族，親戚などに出身者がいる。 4．先生，親などにすすめられて。 5．他に入りたかったが試験の結果やむをえず。 6．とくに理由なし。 7．その他(　　)
本学入学にさいして，該当する項目に○印をつけて下さい。
1．志望した科に入れて満足している。 2．志望した科ではないがこのままでよい。 3．できれば他の科(　　)か他大学(　　)へ入学したかった。 4．その他

「短大生活をふりかえっての意識調査」より

あなたの二年間の短大生活をふりかえってどう思っていますか。該当するものに○印をつけて下さい。
1．自分の能力にふさわしかった。 2．自分の希望する科で満足であった。 3．できれば他の科へ移りたかった。 4．志望した科でないがこのままでよかった。 5．入学時には特に期待してなかったが充実した二年間であった。 6．何も思わない。 7．できれば他の大学へ移りたかった。 8．その他
あなたは二年間の学生生活で重点を置き得たと思っている項目について，いくつでも○印をつけて下さい。
1．専門的知識，技能を身につけることができた。 2．人間形成に役立つ教養，知識，経験を身につけることができた。 3．自分を見つめなおす機会となった。 4．先生との人間的接触を得ることができた。 5．友人との人間的接触を得ることができた。 6．大学生活を楽しむことができた。 7．目ざす仕事に必要な資格を得ることができた。 8．課外活動(クラブ，学生会など)を十分することができた。 9．自分の趣味，特技，スポーツなどを十分することができた。 10．就職条件をよくし，将来の生活安定をはかることができた。 11．その他(　　)

結果と考察

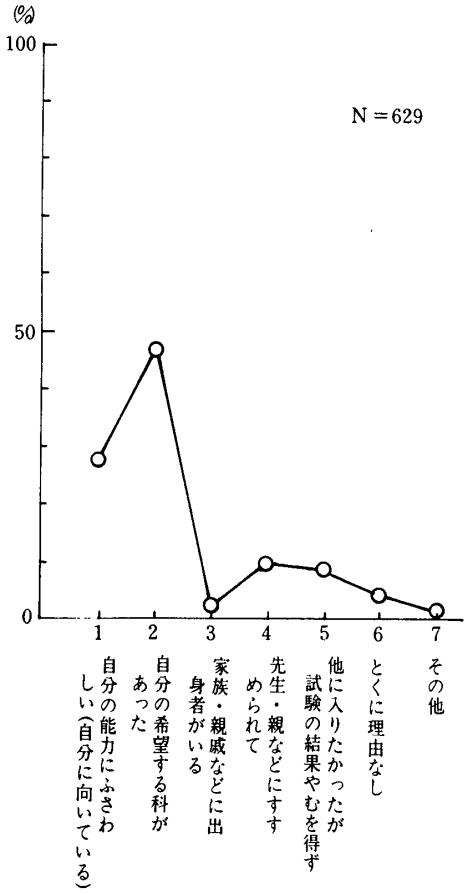

図1-1　志望動機

図1－1は本学1982（昭和57）年度入学生の志望動機の分布状況である。ここには，入学生の多くが主体性のある明確な動機を持っていたことが示されている。しかし，そのような動機を持ち，進路を決定した彼女達ではあるが，本学の現実の姿，志望科の実情を十分理解した上でなされたものであるとは言いがたい。この図1－1の「1．自分の能力にふさわしい（自分に向いている）」への回答率と後出の図3－1の「1．自分の能力にふさわしかった」へのそれとを

比較すれば，彼女たちの理解が不十分であったことが明白である。保育科生からは，入学後の過密時間割を嘆く声がしばしば聞かれる。極端な例では，保育科を志望し入学したのに，保育所保母と幼稚園教諭の区別すらできない者が存在するのである。1978年（昭和53）年度入学生を対象とした倉戸・二階堂・立川・河合・中島・森下（1979）[2)]，1981（昭和56）年度入学生を対象とした中居（1983）の結果と比べて見てもほとんど違いはない。

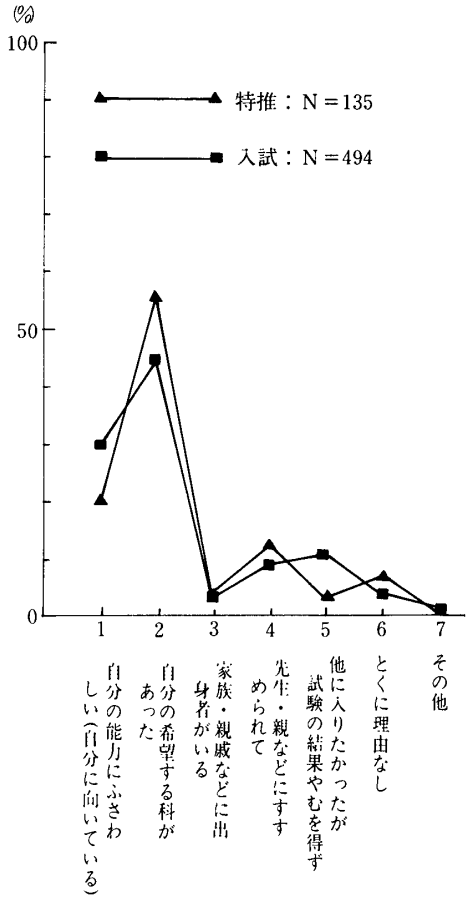

図1－2　志望動機（「特推」と「入試」）

図1－2は，これを「特推」と「入試」に分けた場合の分布状況である。「1．自分の能力にふさわしい（自分に向いている）」と「5．他に入りたかったが試験の結果やむを得ず」への回答率が「特推」よりも「入試」で高い点は，入学試験を受け，合格しなければ本学に入学できないわけであるから，納得できる。しかし「5．」に回答した「入試」の10.1％（50名）への関わり方は重要である。何故なら，入学後も第一志望への未練を断ち切れずに居るなら，勉学をはじめとする学生生活全般を中途半端に送ることが容易に推測できるからである。「特推」にも気がかりな点がある。それは「5．」と「6．とくに理由なし」に回答した3.0％（4名）と6.7％（9名）である。「特別推せん制度」により入学した本学が第一志望校ではないというのは実に奇妙である。特に「6．」への回答に到っては，併設高校からの「特別推せん制度」の意図を踏みにじるものではないかと考えられる。

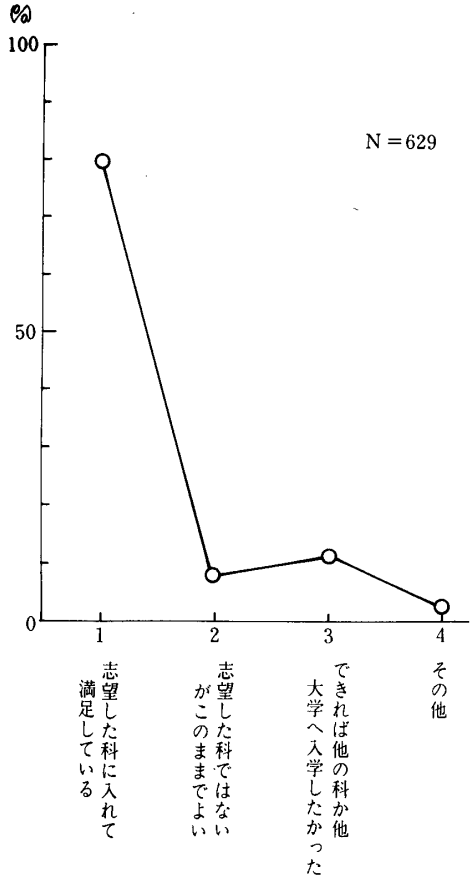

図2－1　入学時満足度

図2－1は入学時の満足度の分布状況である。入学生のほとんどが不満足とは感じていない。これも倉戸ら（1979），中居（1983）とほとんど違いはない。

図2－2は，これを「特推」と「入試」に分けた場合の分布状況である。各項目への回答に両群の間にほとんど差はみられない。注目すべきは，「3．できれば他の科か他大学へ入学したかった」に回答した「特推」の5.9％（8名）である。また，「2．志望した科ではないがこのままでよい」にも8.9％（12名）が回答している。「特別推せん制度」を含む進路指導のあり方に再検討が必要ではないかと考えられる。何故なら，前述の第二（あるいは，三）志望コンプレックスに，受験に合格し入学した「入試」への劣等意識も付加された「特推」が勉学意欲を失う確率は高くなると予想できるからである[3)]。

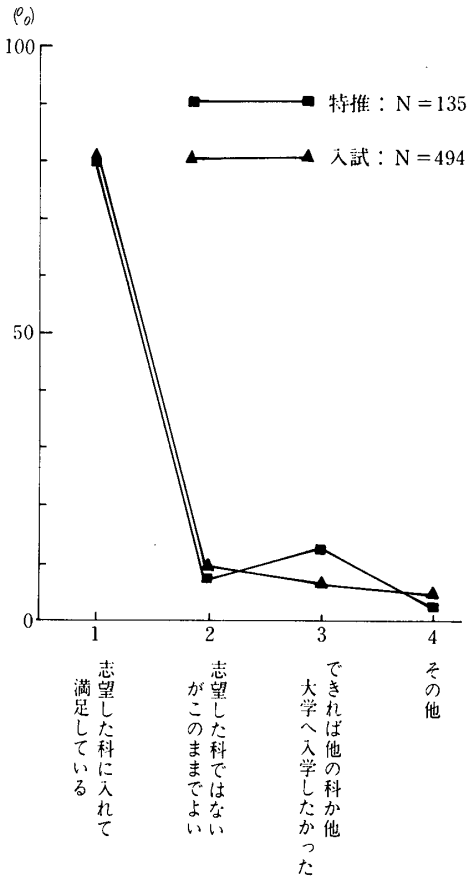

図2-2　入学時満足度(「特推」と「入試」)

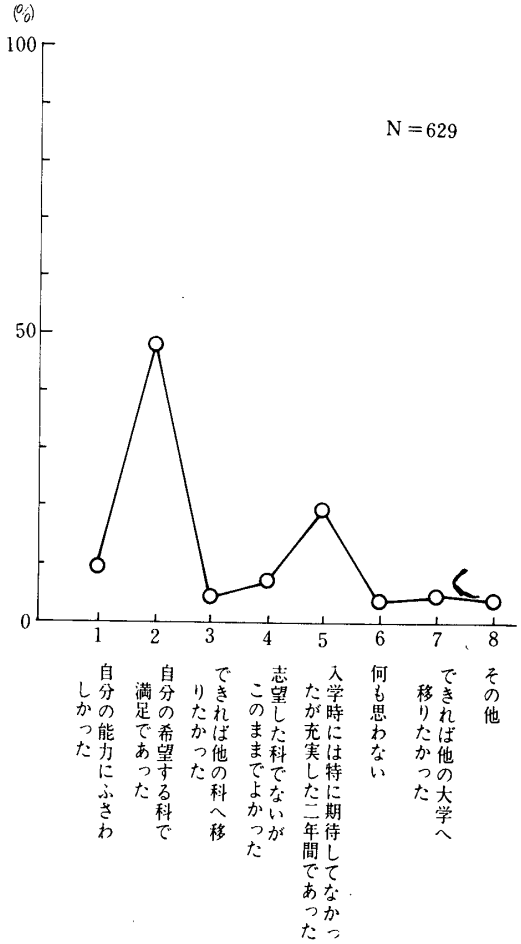

図3-1　卒業時満足度

図3－1は卒業時の満足度の分布状況である。ほとんどの学生が満足と感じている。注目すべきは「5．入学時には特に期待してなかったが充実した二年間であった」に回答した19.1％（120名）である。手続上，「短大生活をふりかえっての意識調査」に回答する際「相談カード」を手許に置いて記入できない。そして卒業が予定している者にとっては，相談室も教師も成績も単位もほとんど恐れるに足らない。タテマエで回答する必要はまったくない[4)]。そこで，これだけの割合の学生が入学時には『特に期待してなかった』のである。彼女達の充実した2年間に我々がどれほど関与したのかも気になる所であるが，それよりも，これだけ多くの学生が本学に期待を抱いていなかったという現実は衝撃的である。以前の倉戸ら(1979)，中居（1983）の結果に酷似している。

図3－2は，これを「特推」と「入試」に分けた場合の分布状況である。「特推」の8.1％（11名）が「できれば他の科へ移りたかった」，2.2％（3名）が「7．できれば他の大学へ移りたかった」と回答している。これら2項目への回答が入学時から持ち越されたものであるか否かは問わない。2年間の学生生活が判断されたのであるから。しかし，本学に関する情報の入手という面では最もめぐまれた条件にある併設高校が，それを十分に活かしきっていないために生じたとすれば，緊急に何らかの対策を講じる必要がある。本学からの質，量ともにこれまで以上の情報提供が，その対策の中に含まれていることはもちろんである。

表2は進学目的の達成度を示している。全体を中居（1983）と比較して見れば，「3．自分を見つめなおす機会となった」が7.1％，「5．友人との人間的接触を得ることができた」が6.5％，それぞれ増加した点を除き，ほとんど違いはない。そして「特推」と「入試」との間にも顕著な差は認められない。それにしても，「8．課外活動（クラブ，学生会など）」や「9．自分の趣味，特技，スポーツなど」が十分にはできず，「1．専門的知識，技能」も習得できず，2年間の短大生活は一体どのように送られたのであろうか。そして，「4．先生との人間的接触を得ることができた」への11.9％という回答は悲惨である。不気味

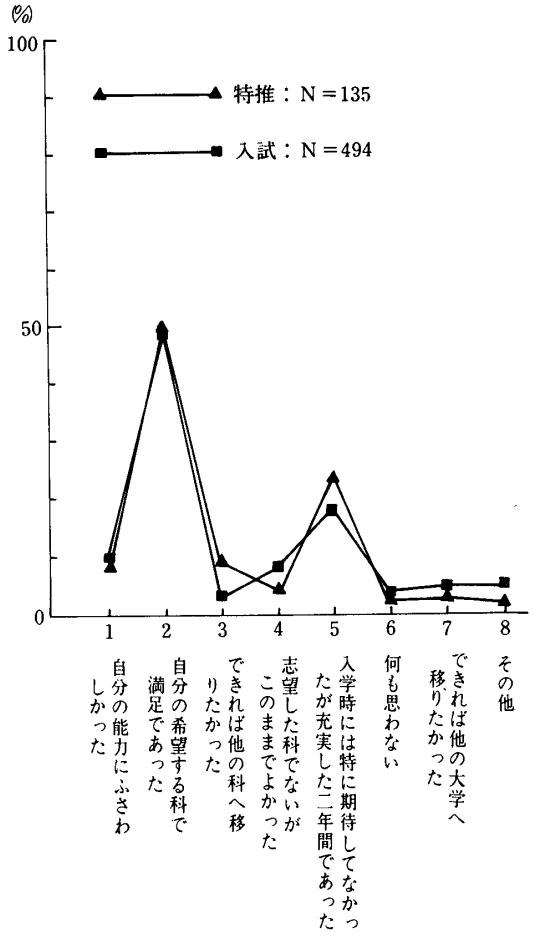

図３－２　卒業時満足度(「特推」と「入試」)

表２　進学目的達成度(％)

	全体 (629)	特推 (135)	入試 (494)
1．専門的知識，技能を身につけることができた	21.9	25.9	20.9
2．人間形成に役立つ教養，知識，経験を身につけることができた	43.2	48.9	41.7
3．自分を見つめなおす機会となった	50.6	48.1	51.2
4．先生との人間的接触を得ることができた	11.9	14.8	11.1
5．友人との人間的接触を得ることができた	85.4	83.0	86.0
6．大学生活を楽しむことができた	57.2	64.4	55.3
7．目ざす仕事に必要な資格を得ることができた	11.1	14.8	10.1
8．課外活動（クラブ，学生会など）を十分することができた	17.8	17.0	18.6
9．自分の趣味，特技，スポーツなどを十分することができた	21.0	20.7	21.1
10．就職条件をよくし，将来の生活安定をはかることができた	8.9	9.6	8.7
11．その他	1.1	0.7	1.2

である。教師が人間的な関わり方をしなかったのであろうか。それとも，教師が人間的ではなかったのであろうか。あるいは，教師との接触などには関心がなかったのであろうか。機械化が進み知識，技能の伝達面でどれほどの教育効果が高められようとも，教育が人間と人間との営みであるという基本を忘れてはならないはずである。

卒業時の満足―不満足の判定に寄与する要因を分析するため，以上のデータに数量化第Ⅱ類を適用した結果を次に示す。卒業時の満足度を基準変数とし，志望動機，入学時の満足度，進学目的の達成度を説明変数とした。そして卒業時の満足度を〔1〕，〔2〕，〔5〕，〔3，7〕，〔4，6，8〕，志望動機を〔1，2〕，〔3，4〕，〔5，6，7〕，入学時の満足度を〔1，2〕，〔3，4〕とコード化した。

表３－１は本学1982（昭和57）年度入学生の卒業時における満足―不満足の判定に寄与するアイテムカテゴリーのスコア，レンジ，偏相関係数の値を示している。表３－２は上記のようにコード化した５つの基準群の平均，分散，標準偏差の値を示している。コード化した項目の内容から判断すると，満足の平均値は大きく不満足の平均値は小さい。判定の度合を示す相関比の値は0.164であった。表３－１のレンジと偏相関係数の値は共に各アイテムが満足―不満足の判定に及ぼす影響力の強度を示している。今，志望動機を例にとれば，レンジの値（0.859）は他のアイテムを含んだ場合の強度であり，偏相関係数の値（0.150）はそのアンテムのみの強度である。さて，表３－１からは入学時の満足度が卒業時の満足―不満足の判定に最も強く影響していることがわかる。入学時の満足度のスコアは〔1，2〕＝0.218，〔3，4〕＝－1.478である。表３－２を参照すると，「１．志望した科に入れて満足している」か「２．志望した科ではないがこのままでよい」に回答した群は卒業時の満足の判定に影響しており，「３．できれば他の科か他大学へ入学したかった」か「4．その他」に回答した群は不満足の判定に影響している。すなわち，入学時の不満足が卒業時の満足度を低める最も強力な要因であった。これに次いで強力な要因は志望動機である。「１．自分の能力にふさわしい（自分に向いている）」か「２．自分の希望する科があった」に回答した群は満足の判定に，その他の項目に回答した群は不満足の判定に，それぞれ影響している。以上の結果は中居（1983）と同様である。繰り返しになるが，志望動機や入学時の満足度に我々が直接関与できる部分は非常に少ない。

表3-1 カテゴリースコア(全体)

アイテム		カテゴリー	スコア	レンジ	偏相関係数
志望動機		1．自分の能力にふさわしい(自分に向いている) 2．自分の希望する科があった。 3．家族、親戚などに出身者がいる。 4．先生、親等にすすめられて。 5．他に入りたかったが試験の結果やむをえず。 6．とくに理由なし。 7．その他	0.220 −0.639 −0.621	0.859	0.150
入学時満足度		1．志望した科に入れて満足している。 2．志望した科ではないがこのままでよい。 3．できれば他の科(　　)か他大学(　　)へ入学したかった。 4．その他	0.218 −1.478	1.696	0.225
進学目的達成	1．専門的知識、技能を身につけることができた。	○	−0.186 0.662	0.848	0.148
	2．人間形成に役立つ教養、知識、経験を身につけることができた。	○	−0.127 0.166	0.293	0.062
	3．自分を見つめなおす機会となった。	○	0.074 −0.072	0.146	0.032
	4．先生との人間的接触を得ることができた。	○	−0.065 0.477	0.542	0.074
	5．友人との人間的接触を得ることができた。	○	−0.506 0.087	0.593	0.090
	6．大学生活を楽しむことができた。	○	0.197 −0.147	0.344	0.071
	7．目ざす仕事に必要な資格を得ることができた。	○	−0.043 0.345	0.388	0.050
	8．課外活動(クラブ、学生会など)を十分することができた。	○	0.026 −0.122	0.148	0.025
	9．自分の趣味、特技、スポーツなどを十分することができた。	○	0.005 −0.018	0.023	0.004
	10．就職条件をよくし、将来の生活安定をはかることができた。	○	−0.022 0.225	0.247	0.031

表3-2 基準群の平均，分散，および標準偏差（全体）

	平均	分散	標準偏差
1．自分の能力にふさわしかった	0.232	0.830	0.911
2．自分の希望する科で満足であった	0.368	0.594	0.771
5．入学時には特に期待してなかったが充実した二年間であった	−0.357	1.120	1.058
3．できれば他の科へ移りたかった 7．できれば他の大学へ移りたかった	−0.423	1.108	1.053
4．志望した科でないがこのままでよかった 6．何も思わない 8．その他	−0.541	1.105	1.051

ほとんどないとさえ言い得る。しかし，進学目的の達成度では，その余地はかなり残されているのである。専門的知識，技能の習得，教師との人間的接触，資格などの項目に○印記入した群は満足の判定に影響している。一方，友人との人間的接触，専門的知識，技能の習得などの項目に○印記入しなかった群は不満足の判定に影響している。ポイントは志望動機と専門的知識，技能の習得（資格取得はこれによる）と教師や友人との人間的接触である。そこで表2に注目すれば，卒業時の満足度を高めるために我々がまだ着手していない部分がかなりあることが理解できる。

表4－1と表4－2は「特推」の結果である。相関比の値は0.243であった。「特推」における卒業時の満足―不満足の判定に最も寄与している要因は入学時の満足度であり，入学時の不満足が卒業時の満足度を低める最も強力な要因であった。これに次いで強力な要因は志望動機である。「3．家族，親戚などに出身者がいる」か「4．先生，親等にすすめられて」に回答した群は不満足の判定に影響している。そして，教師との人間的接触，資格取得などの項目に○印記入し

た群は満足の判定に影響している。また，自己再検討，大学生活エンジョイなどの項目に○印記入した群は不満足の判定に影響している。家庭での家族との話し合い，併設高校での進路相談を経て進路を決定したと思われる「特推」であるにも関わらず，何故，卒業時に不満足と判定されるのであろうか。話し合いや進路相談が有害であるはずがない。自主性のない消極的な，あいまいな動機しか持たない段階で進路決定することが，本学卒業時の本人にとって好ましい結果を導かないことは確かである。何故なら，ややおそまきながらも2年間の短大生活が「3．自分を見つめなおす機会となった」に回答した群が不満足の判定に影響しているのであるから。

表4-1 カテゴリースコア(特推)

アイテム		カテゴリー	スコア	レンジ	偏相関係数
志望動機		1．自分の能力にふさわしい(自分に向いている) 2．自分の希望する科があった。 3．家族、親戚などに出身者がいる。 4．先生、親にすすめられて。 5．他に入りたかったが試験の結果やむをえず。 6．とくに理由なし。 7．その他	0.203 −1.097 0.099	1.300	0.239
入学時満足度		1．志望した科に入れて満足している。 2．志望した科ではないがこのままでよい。 3．できれば他の科(　)か他大学(　)へ入学したかった。 4．その他	0.160 −1.386	1.546	0.247
進学目的達成	1．専門的知識、技能を身につけることができた。	○	−0.101 0.288	0.389	0.088
	2．人間形成に役立つ教養、知識、経験を身につけることができた	○	−0.188 0.197	0.385	0.100
	3．自分を見つめなおす機会となった。	○	0.232 −0.250	0.482	0.131
	4．先生との人間的接触を得ることができた。	○	−0.113 0.650	0.763	0.143
	5．友人との人間的接触を得ることができた。	○	0.115 −0.024	0.139	0.027
	6．大学生活を楽しむことができた。	○	0.419 −0.231	0.650	0.159
	7．目ざす仕事に必要な資格を得ることができた。	○	−0.095 0.547	0.642	0.110
	8．課外活動(クラブ、学生会など)を十分することができた。	○	0.038 −0.184	0.222	0.043
	9．自分の趣味、特技、スポーツなどを十分することができた。	○	−0.020 0.075	0.095	0.020
	10．就職条件をよくし、将来の生活安定をはかることができた。	○	−0.023 0.217	0.240	0.038

表4-2 基準群の平均，分散，および標準偏差（特推）

	平均	分散	標準偏差
1．自分の能力にふさわしかった	0.614	0.623	0.789
2．自分の希望する科で満足であった	0.379	0.589	0.768
5．入学時には特に期待してなかったが充実した二年間であった	−0.188	1.146	1.070
3．できれば他の科へ移りたかった 7．できれば他の大学へ移りたかった	−0.417	1.261	1.123
4．志望した科でないがこのままでよかった 6．何も思わない 8．その他	−0.723	0.772	0.879

表5-1 カテゴリースコア(入試)

アイテム		カテゴリー	スコア	レンジ	偏相関係数
志望動機		1．自分の能力にふさわしい(自分に向いている) 2．自分の希望する科があった。 3．家族、親戚などに出身者がいる。 4．先生、親等にすすめられて。 5．他に入りたかったが試験の結果やむをえず。 6．とくに理由なし。 7．その他	0.202 −0.357 −0.724	0.926	0.137
入学時満足度		1．志望した科に入れて満足している。 2．志望した科ではないがこのままでよい。 3．できれば他の科(　)か他大学(　)へ入学したかった。 4．その他	0.219 −1.397	1.616	0.213
進学目的達成	1．専門的知識、技能を身につけることができた。	○	−0.201 0.763	0.964	0.162
	2．人間形成に役立つ教養、知識、経験を身につけることができた。	○	−0.143 0.200	0.343	0.072
	3．自分を見つめなおす機会となった。	○	−0.008 0.008	0.016	0.003
	4．先生との人間的接触を得ることができた。	○	−0.043 0.347	0.390	0.051
	5．友人との人間的接触を得ることができた。	○	−0.782 0.127	0.909	0.133
	6．大学生活を楽しむことができた。	○	0.117 −0.095	0.212	0.043
	7．目ざす仕事に必要な資格を得ることができた。	○	−0.041 0.368	0.409	0.051
	8．課外活動(クラブ、学生会など)を十分することができた。	○	0.017 −0.076	0.093	0.015
	9．自分の趣味、特技、スポーツなどを十分することができた。	○	0.021 −0.078	0.099	0.017
	10．就職条件をよくし、将来の生活安定をはかることができた。	○	−0.024 0.257	0.281	0.035

表5-2 基準群の平均，分散，および標準偏差（入試）

	平均	分散	標準偏差
1．自分の能力にふさわしかった	0.216	0.811	0.901
2．自分の希望する科で満足であった	0.369	0.607	0.780
5．入学時には特に期待してなかったが充実した二年間であった	−0.510	1.030	1.015
3．できれば他の科へ移りたかった 7．できれば他の大学へ移りたかった	−0.429	1.140	1.067
4．志望した科でないがこのままでよかった 6．何も思わない 8．その他	−0.481	1.099	1.048

表5－1と表5－2は「入試」の結果である。相関比の値は0.162であった。「入試」においても卒業時の満足―不満足の判定に最も寄与している要因は入学時の満足度であり，入学時の不満足が卒業時の満足度を低める最も強力な要因であった。これに次いで専門的知識，技能の習得の項目に○印記入した群は満足の判定に強く影響している。そして，入学時に明確な志望動機を持っていなかった，すなわち「1．自分の能力にふさわしい（自分に向いている）」と「2．自分の希望する科があった」以外に回答した群は不満足の判定に影響している。そして，資格取得，教師との人間的接触などの項目に○印記入した群は満足の判定に影響している。また，友人との人間的接触，専門的知識，技能の習得などの項目に○印記入しなかった群は不満足の判定に影響している。すなわち，ポイントは表3－1で見出したものと同じである。志望動機と（資格取得につながる）専門的知識，技能の習得と教師や友人との人間的接触である。繰り返せば，表2が我々に多くの手がかりを示唆している。

注

1) 本論文作成にあたり，資料を提供して頂いた本学学生相談室に感謝いたします。
2) キリスト教科生が対象には含まれていない。
3) 西日本地区における本学各科の合格難易ランキングは次の通りである（螢雪短大　1984　7月旺文社）。英文科第2位（文，外国語），保育科第2位（教員養成，保育），家政科第1位（家政），およびキリスト教科第30位（文，外国語）。
4) この意味では「相談カード」と「短大生活をふりかえっての意識調査」が記名式であった点に注意を要する。特に前者，入学時に学生相談室に提出すべき「相談カード」に，すべての学生がホンネを回答記入するとは考えにくい。したがって志望動機（図1－1と図1－2）や入学時の満足度（図2－1と図2－2）を読みとる際には，タテマエが含まれていることを考慮せねばならない。

参考文献

倉戸ツギオ・二階堂公子・立川皓三・河合熙・中島武彦・森下充子　1979　本学の学生生活における満足―不満足の要因分析　平安女学院短期大学紀要，**10**，48―55。

中居伊久緒　1983　本学学生の短大生活における満足―不満足の要因の分析：「相談カード」および「短大生活をふりかえっての意識調査」にもとづいて　平安女学院短期大学学生相談室報告，2―11；資1―資11。